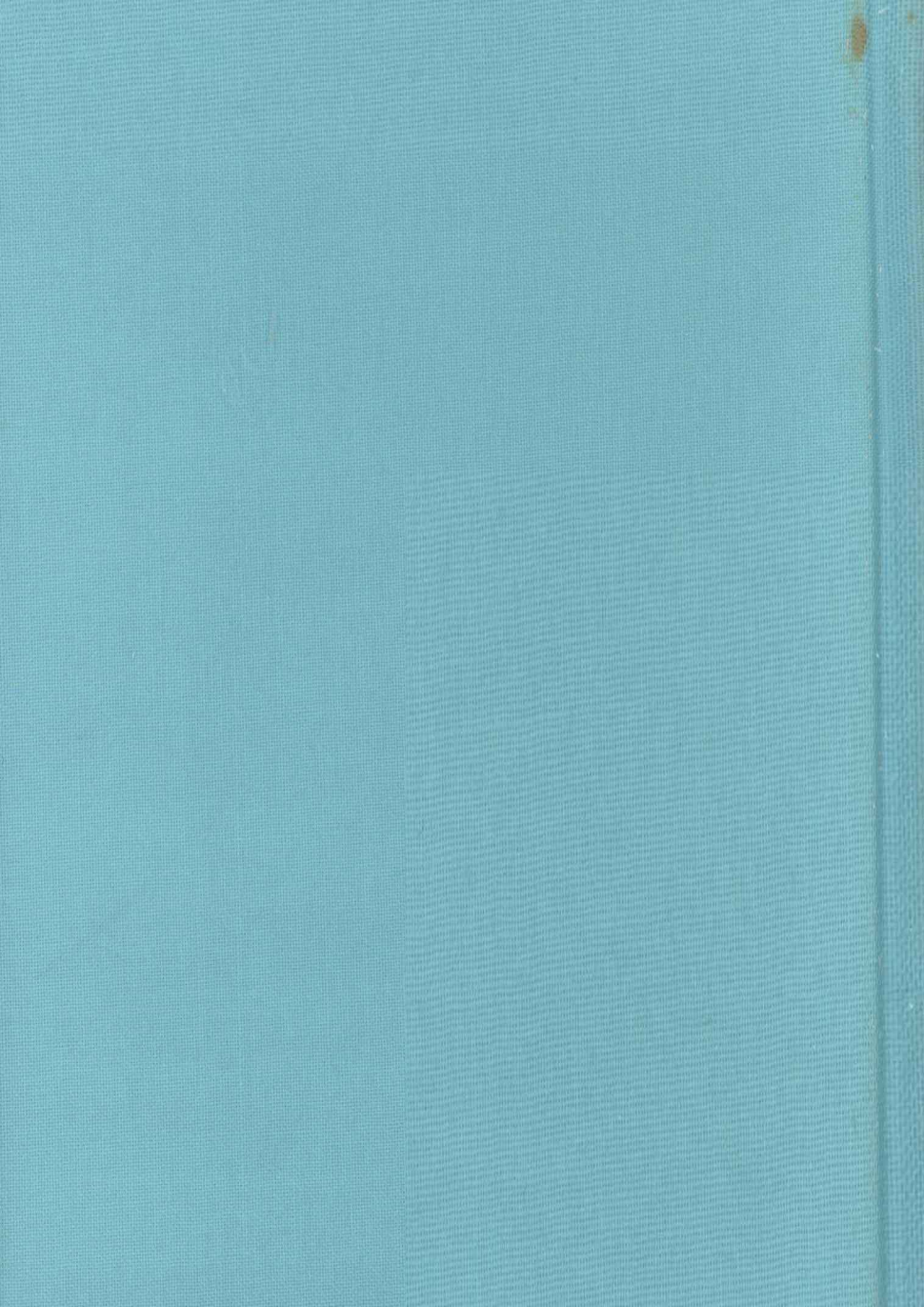




部落問題文芸作品選集 第五十巻

昭和五十五年二月二十日発行

定価 二二〇〇円

発行者

松本明

発行所

株式会社 世界文庫

東京都目黒区洗足二―二―一五十二

電話〇三(七一六)六二五一(代表)

振替 東京 四―七八四九八番

落丁、乱丁本はお取替えます。

部落問題文芸・作品選集

第50卷

藤陰 隠士

落

葉

川合

仁

屠殺場見学

河内銀二郎

涙の物語

神近 市子

村の反逆者

三島霜川

屠牛場の娘

世界文庫版

目次

一、落葉

藤陰隱士著

5頁

二、涙の物語

河内銀二郎著

155頁

三、村の叛逆者

神近市子著

177頁

四、屠殺場見学

川合 仁著

213頁

五、屠牛場の娘

三島霜川著

227頁

一、落葉

落おち

葉

目次

次^レ

〇一

葉^は

二丁

○
二子

葉は

二十一丁

〇三

葉は

三十七丁

○
四^上

葉は

五十七丁

○
五^し

葉は

七十七丁

○
六む

葉^は

九十八丁

○
七^七

葉^ハ

百廿五丁

目く

次¹²

畢オノ

落葉

藤陰隱士著

一葉

寐る間のみ人にかはらぬ思ひ出を、うき世にかへす曉の鐘。と述懐せしは、京師
 の乞丐にして、其が心ぼそさも想はるゝに、酒一と節め々まれしを、武藏野にあ
 まるばかりの報捨かな。とよろこびし、東都の乞丐がこゝろ細さもまた哀れに悲
 しかりけり。乞丐となり果つるもの、孰れ不幸のこゝろを重ねて、になへる杖も折
 るゝばかりに、破れ衣のつゐるよしなく、世にも人にも棄てられて、身にまどふ
 憂きことの、竭きぬ魂の緒はづかに繋ぎ、草の葉ずゑに置く露の、散り失せんも
 消えはつるも、夕の風に任せたるなるべし。姿かたちは變はるとも、心まで變は
 らねば、隨園が乞丐の詩を賦して、如今不受嗟來食。邨犬何須吠不休。と其が潔
 きを稱せしごとく、淵明が、銜戢知何謝。冥報以相貽。と其が直なるを憐みし
 ごとく、誰かこれを哀とおもはざらん。長崎の禪林寺の僧も一と回は這の群に入

り、伍子胥もまた路の傍に立ちても乞ひたると言へば。しかはあれど、麻の中に蓬生ひ、葱韭の臭きは薺蘭の香を奪ふでとく、曲れる者はいよく曲り、臭き者いよく臭きことのなからずやは。

今天が下は、天皇の聖恩の露にうるほひて、縣の果の民々さもいやがへに繁れるから、また軒に乞ひ路に乞ふ者なきに似たれど、往にし江戸の都たりしときは、實に蠅のどとく聚ひ、蛆のどとく連りて、いと悲しげなる聲を發げ、「御旦那さまや御新造さま。盲目にどうぞはや…片輪ものが助かります。同勢十人で御座ります。」などゝ家ごとに乞ひ歩き、また辻々に立ちて、曲物の飯器のきたなげなるをさし出だしさし寄せて乞ひけるが、若いたるや若きや妻や兒や、幾群幾人といふを知らねば、頭ありて支配をなし、親方ありてとり締りをしけり。頭は淺草の車善七と言へる者にて、親方是一群にかならず一人ありき。住居は人の軒した、木の下などを常としたれど、中には蘆家などかけて住ふもありぬ。

此處は麻布の藪下にて、淨光寺といへる瘦寺のかたはらに、古りたる薦家ありて、乞丐七人ばかり宿りぬけり。晝のほどは芝の切通しに出でゝ物を乞ひ、夕にいた

りて歸るを常としけり。今日は當寺に新葬の來たりぬとて、例より早くかへり來たりしが、眼飛びいで、野ら猫のうち殺されたらんと覺しきもの。鼻柱くつをれて猿の獸店に釣り下げられたらんと見ゆるもの。手の指の曲みてうち返りたるは乾びたる生姜のごとく。具黒き脛の膨みて、穢げなる汁出でたるは、くされ芋も甞ならず。さるをまた海藻のとき衣を纏ひ、古りたる酒筵を被ぎしかば、當時大河の蘆生あるあたりに流れ寄る者ならずば、塵芥の山をなす塵塚などに棄てある、何ものか裏みし薦包の日數經たるに似て、嘔をも吐くべきに、古草鞋とふる草履を左右の脚に穿き、あるひは隻脚の足首はいかになりしか古布に裹みて、皮も剝がぬ杉のうら木に助けられ、是れ彼れ具はぬ片輪ものらが、うち連れてかへり來たりたるは、彼の資朝卿の見たまひなば、さらにいぶせく思されて、甞に樹どもをほり棄てらるゝ許りにあらざるべし。

そも此の寺は法華寺にて、庭の片邊に鬼子母神をまつりければ、其が縁日には詣づるもの多く、殊に子なき女などは、日々詣づるもありける程に、この乞丐ども何日となく門前に來たり住みて哀憐を乞ひけるが、貧き寺とて寺男もなかりしか

ば、あしたには庭の落葉を拂ひ、ゆふべには水など釣りて、住僧の補助となりしを、得てそ幸ひなれど、物置小屋のいたく壊れて、建ち腐れのごとくなりぬけるを借し與へ、新葬などあるときは塋穴を掘らせ、墓所の掃除もその役のごとくに倣さしめき。

この乞丐の中に敦賀と呼べる、面がまへ最と醜く、心ざま最と惡しきものありて、四邊の乞丐どもが親方となり、貰ひたる錢を若干かづゝ催り取りて、もし持て來ぬものあれば、兒分の者に曳き來らせて、眼鼻口などへ竹切を突き通し、あるは竹筒を指へはめ逆にをり挫きて、太くこれを懲しけるほどに、いつか小金も溜りて夥伴のものに貸しつけ、高利をむさぼり、強慾と猛威を張りて、常に茶瀝漉をくらひ、あらぬ色情さへ起して、言ひがたき所業におよぶこと多ければ、順禮なとの妻が娘を連れて、あたりの巷をもらひありく者あれば、兒分をして曳き來たらしめ、一夜さ薦家へ止め、飽くまで奸淫て放ちやるも常なりけり。

兒分の中にて、江戸と呼び、鎌倉と呼ぶものは、かたち甚だ醜からぬをもて、常に寺の用を足さしめ、この日もまた衣服を替へて寺へ至り、塋穴を掘り水などを釣

り、餘のものは門前にならびて、新葬を送り來たる人々に乞ひて、「どうぞ御供養に片輪ものをお助け下さいまし。」と仰いでは掌も磨り切るばかりにをがみ、伏しては頭もて大地も音するばかりに打ち叩きて、臆て申刻すぐるころに、悉な薦家へかへり入りけり。

頃しも冬の初めにして、山おろしの風は木の葉を吹卸して、薦なぞ上げたる薦家の屋根は隠したれど、疎になりたる竹垣を包みし朝顔の蔓かれ果て、外より内を見透したるをある筵を釣りて覆ひ隠し、寺にて貰ひ來たりし辨當なとの餘り物をとり廣げ、喰ひかきたる蓮根の煮つけも捨てずして、喰ひ缺きたる如き皿へ盛り、飯はことごとく鍋へ入れて、又是れ貰ひ來たりし大根を葉ぐるみ刻みて、雑炊に煮んとたち騒ぎたる、其が空腹の面も青々として、燻ぶる生木を燃しつくれば、烟に咽びてせきこみつゝ、涙を流し涎を流して、まち構へたる其が上手に、古壘二疊じき重ねて、これに座したる敦賀は、土浦小僧とよぶ土氣のぬけぬ小童に、梅毒の潰えて何ものか流れ出づるを拭はせ、「えい、生地ねえ亡者だ。」と横面を蹴なぞして、やがて復た體の濕瘡を抓かせて、「この鏡猫めえ、爪でも磨ぎや

アしめえし、ひッ抓きやがッて…ちッと擦れえ。」と擦らせつゝ、「是ウ、江戸ウ。
我やア例の的を、いゝか…なに、寺ぢやア亦一と緝だア、へん、人をつけ…能い
能い其れで買ッて來い。」と茶藨漉を買はせて、「どれ見せろ。」と貫目を振り、「我や
ア途中で甜めやがッたな。」と白眼つけつゝ、二三椀傾けて、「あゝまた痒くなッて
來やがッた。小僧徐々ど抓え。…あはゝゝ小田原、我やア龍土へおッ走ッて、梅坊
をひッ張ッて來い。ふあん、那奴年はねッからだが中々手取りだア、畜生めえ。…
えゝ其りやア能いわ、追ッ奔ッて來る間にやア養らア。…鎌倉、ちッとなまり節で
もくされ節でも度鳴れく。」
折から入口の筵を掲げ、音聲鼻へかゝりて、「暫く暫く。」と止むる者あり。只看る
隻眼はとび出して蟹の目玉のごとく、隻眼は凹みて谷底におちたる螢火ほどの光
りを放ち、額のあたりに大きなやかなる洞穴ありて、髪の毛の蓬々に覆ひたるは、
蛇にても住むべく見えて、鼻柱なく口を耳まで開きて、「おはゝゝ」どうち笑ひた
るが、又これ乞丐の親方にて、被ぎたる古筵を脱ぎすつれば、何れそでなき者と
見え、襦袢の裾より股の彫物あらはれしが、夫れさへ微瘡などのために形を失ひ

人か獸物か見え分かぬ、眞くろき肌燻ぶりて、いとも眞黒き信樂焼の破土瓶に破
 碗を蓋にして、かけ替へもなき魂の緒を、つなぎ合はせし觀世縷の蔓が斷るれば
 あな殆な、碎けて舊の土に復るは惜しくもあらで、中の物こそ惜しけれと兩手に
 持ちて、「おひやア、敦賀の大將。今日兼て頼みの、ひゝ…代物を睨んだはら、こ
 こ五的入れて貰つて來たんだ。ひやア色男的。」と醗酒にても傾け來しにや、熟柿
 の腐れたる如き香ひさせて、よろ／＼と躓き上りたり。

敦賀は「あはゝゝア」と高笑ひして、「廣尾の兄弟、能く來をツた。まア一抔あふれ。」
 と欠碗をさして、「代物と言ふな何だア。うん…うん、其奴は素敵だア。はゝ
 はゝ。小田原、龍土の使はまア小田原だア。…兄弟、耳を貸せえゝ能い歟、それ
 で五貫は帳消しにすらア。なに、うん／＼。是ウ江戸ウ、兄弟のも打込んで熱くし
 ろえ、ろして粥が煮えたら…酒も一杯づゝ呉れて遣らう。其ん代り我等ア一骨を
 らにア成んぬえぞ。はゝゝゝ、其様におあり難う御座いますでもあるめえ。」「おは
 はゝア、幸福者め。是ウ今夜やア大將の祝ひだア、又どは無へ祝ひだア。飲め飲
 めえ。」

臭きものに付く蠅は臭きを知らず、類もて合ふ廣尾の乞丐が、常に敦賀と親くなし、酒と賭とに身を入れて、一縮二縮と借りたる利足は、體の虫の生くごとくに殖えて、五貫ばかりの多きに上りけるを、金錢は他人とて、親き中も烏羽玉の闇雲に催らるゝ苦しさに、敦賀が色慾にも強くして、一生のおもひ出にぞ、思ひも寄らぬ望みをいだきて、折々これを打ち語りては、圓な眼をほそく垂れ、低き鼻を詰まらせて、常さへ曲みたる口のいど曲みて締りなく、連々と涎を流しぬるを知りたりければ、其が望みの者をとらへ授けて、飽くまで情慾を霽させ、よりて負債の責めを遁れんとはしたる如し。

まだ時刻も早しとて、しきりに白馬に鞭を加へて、狂ひ亂るゝころには、江戸鎌倉々ども一と團居にして、「已さまが若い時にやア、随分面白え事も有つて、女と言ふ女ア占めねえ事も無えんだア、斯う見えても中々の色男で……笑ふない、憚りながら女郎なり野郎なり、買はねえなア無えんだア。喃大將、大將は大將だけで、香る大將薺を喰らへと言ふだらう、おはゝゝゝア。」「あッはゝゝゝ、うむく吐しやアがる。だが、野郎あそびやア、えゝゝそうく、散りかゝる花のもと

におほかみ
 に狼のねてけつかるが如し、女郎になじむなア入りかゝる月の前に燈灯のねえ心
 するとか言ッて、彼奴等ア本統ア面白くねえのよ。己ア随分懲させられたから。…
 兄弟、お主やア松前だッて吐すが、松前にも女郎アあるかア。「有るッて無えッ
 て藥鑑と言ッて…」何、藥鑑だも。「左様よ、初やア内證で轉んだんだが、其奴
 ら尻がはねゝから、藥鑑と言ッたのだア。」「はゝゝゝ、己等の方ちやアかんび
 うと言ひやがッての、夕顔をさらすと言ふんだとよ。お臍が茶だア。……江戸我
 やアでろれん讀で方々を歩いたと言ふが、外ちやア何なだ。」「左様でげす。種々
 の稱がありやして…」「ひゝゝ」「近え所の伊豆でもうしやせば、下田でせんぶり、松
 崎でかねんぼと言ひやさア。信州なんでも、上田でべさい、松本ではりばこと言
 ひやさア、又西の方へ往きやすと、長州でかこまはし、肥後できぶし、肥前ではい
 はち……」「能いやく、其れで澤山だア。…おい、誰か來たと。…何、今内を出たと、
 左様…夫れちやア大將ひッ擔いで來るはらな。」「あッはゝゝゝ、本統に做るか
 …あり難え、間の能い時にやア何方まで能い歟、今夜ア和尚めも醫者と化けやが
 ヲ、黄八丈の絹衣に、黒縮のお羽織と來て、頭巾眼深に一刀をきめ込み、雪駄